平成 17 年 11 月 30 日作成

ホツマツタヱの暦の考察　　（第 22・23 号）
ホツマツタヱ　再発見

吉　田　六　雄

多賀の国府　ツボ若宮　ホツマツタヱ「ゆかりの地」を歩く

この秋、東北仙台地方および福島と茨城の県境のホツマツタヱ「ゆかりの地」を旅して来た。道順としては、多賀城→塩釜神社→金華山→勿来関の順を計画した。特に多賀城では、多賀の国府、ヤマテ宮の所在地の地形探索。また塩釜神社ではホツマツタヱの伝承が、ご由緒書にどの様に記載されているか。また金華山の風景。更に勿来関の地形等に興味を持って出発した。いずれにしても、ホツマツタヱの再発見の旅を大いに期待した。

多賀の国府　ツボ若宮

時は紀元前約 1,217 年の頃であろうか。オシヒトの父であるワカヒト君が、祖父のトヨケより「天御子学ぶ　天の道」として学ばれた由緒ある御座の跡に、また都が移され「多賀の国府・ツボ若宮」と名付けられたと云う。このことをホツマツタヱの直訳文では、次の様に説明している。

11-1
25 鈴　　100 枝 11 穂に
日高見の　御座の跡に
また都　　移して名付く
11-2
多賀の国府　ツボ若宮の

更に由緒ある多賀の国府・ツボ若宮を少し述べると、このツボ若宮はケタツボの「ヤマテ宮」の跡地であった。

11-4
オシヒトの　ヲシホミミとぞ
聞こし召し　多賀若宮に
ヒタします

またこの由緒あるヤマテ宮においてオシヒトことヲシホミミは、ワカヒト君の日嗣として養育された。この様な「ヤマテ宮」→「多賀の国府・ツボ若宮」の跡地を、現在では多賀城政庁跡がそうであったとしている。今回その由緒ある「ヤマテ宮」→「多賀の国府・ツボ若宮」の足跡を追って、多賀城政庁跡に到着した。

(注)ヤマテ宮→多賀の国府・ツボ若宮を「多賀城」とした研究本を目にするが、多賀城はこの町の全体が多賀城である。従って正確に表現するならばヤマテ宮→多賀の国府・ツボ若宮は、多賀城政庁跡となる。また多賀城の史跡の案内板「京を去る一千五百里多賀城の歴史見て歩き」には特別史跡・多賀城廃寺が案内されており、多賀城廃寺跡は奈良時代の整備された区画跡が目を引いた。

旧ヤマテ宮の多賀城政庁跡　今は昔

多賀城政庁跡の方角は、仙台市の北東方向に位置する。また仙台駅より東北本線に乗車し、国府多賀城駅で降りた場所より見て「西北」の方向になる。また多賀城政庁跡の所在地は、多賀城

市市川字城前となっている。地形的には、多賀城政庁跡のある位置はなだらかな丘陵になっており、ほぼ丘の上側に位置していた。

このため多賀城政庁跡からの遠い景色の眺めは良く、昔を偲ばせてくれた。現在の多賀城政庁跡の状態は不整地で、芝状の草が広い場所の所一面に生えており、その真ん中に100m四方で高さ70～100cmの台座が残されていた。この台座の大きさより推定すると、近年の昔に大きな建物があったことを偲ばせてくれた。このことを考えながら、私はこの多賀城政庁跡が、ホツマツタヱ時代のヤマテ宮なのかと自問して見た。すると地名の変遷を追っていくと多賀の国府・ツボ若宮→陸奥国・国庁の順になっているが国府、国庁としての地位は変わらない様で、ここが政庁の跡でもありヤマテ宮に違いと思えて来た。

次の目的地の「塩釜神社」に向かう前にもう一度、入り口の二つの案内板を読み返して見た。二つの案内板の位置は少し離れているが、二つの案内板には次の文章が掲示されていた。

特別史跡　多賀城跡

多賀城は、古代に陸奥国(現在の福島、宮城、岩手三県)の国庁が置かれたところで、奈良時代には鎮守府も所在していた。その遺構は約九百メートル四方の不整方形の地で発掘調査により、築地塀で周囲を区画し、中央部の約百メートル四方の地に政庁がある他、官舎や兵舎が立ち並んでいたことが判明した。昭和四十一年四月十一日特別史跡指定

多賀城政庁跡(内城地区)

もう一つの案内板には、次の様に掲載されていた。多賀城は、奈良、平安時代に陸奥国府が置かれたところ。多賀城跡のほぼ中央にあり内城地区と通称されるこの地区では、発掘調査の結果、四回も作りかえられた陸奥国府政庁の遺構が発見された。各時期とも正殿、東西脇殿等が左右対称に配置され、九州太宰府の都府頭楼等と近似している。現在、地上で見える遺構は、奈良時代後半(第Ⅱ期約千二百年前)の遺構を修理復原したもの。

塩釜神社

塩釜神社のある塩釜市は、多賀城市の東北の方向になる。また多賀城政庁跡から塩釜神社のある方向は、ほぼ東より少し南方向の塩釜湾方向に位置していた。距離にして約5Kmくらいで塩釜神社到達する。塩釜神社は、塩釜市一森山の小高い山の上にあった。表参道は長い階段を登り、唐門を抜けて拝殿に到達した。だがふと見ると他神社では、参道の真向かいにあると思われた「一つの拝殿」がないのである。その拝殿は真ん中に空間を配置し、左宮と右宮に別れていた。不思議に思い左右の宮の祭神はだれだろうかと思案し祭務所に尋ねると、「正面の社殿の左宮に武甕槌神(たけみかづちのかみ)・右宮に経津主神(ふつぬしのかみ)をお祭りしている」とのことであった。では塩釜神社と云うからには塩釜神はいないのかと思い、「塩釜神はどこにいらっしゃいますか」と尋ねて見た。するとは、「別宮がそうだ」との返事であった。そう云えば唐門を抜けて真向かいの10m先に左右の宮があるが、その手前の5mくらいの位置より、右方向に石畳の参道が続いておりその向こうに神殿が見えた。ここが塩釜神をお祭してある「別宮」であった。

塩釜神社のご由緒

祭務所より戴いた「参拝のしおり」の塩釜神社の説明を読んで見ると、「当神社の創建の年代は明らかではありませんが、武甕槌神と経津主神が陸奥国を平定した時に、両神の道案内をした塩土老翁神がこの地に留まり、人々に塩づくりを教えたことに始まると伝えられています。当社は・・・・(他省略)。」

塩釜神と塩土翁神との年代比較

下調べをせずに塩釜神社を訪問したが、経津主神、武甕槌神および塩土老翁神はホツマツタヱ文献に登場する神でありそれなりに承知していたが、経津主神、武甕槌神までが塩釜神社の祭神であったとは少し驚いている。またその後ホツマツタヱ文献を調べて見ると、フツヌシは多賀の国府に来たと思える記載がある。

それは紀元前1217年頃の「日高見の　御座の跡に　また都　移して名付く　多賀の国府　ツボ若宮の」の頃である。11-10～11文「かねてホツマと　ヒタカミの　境に出待つ　フツヌシが」と、フツヌシが茨城県と福島県の県境に来たことをホツマツタヱ文献は記載しており、このことより「多賀の国府や塩釜を訪問しただろう」ことは容易に推定される。また13-1～3文には「多賀の国府　ツボ若宮の　暑き日の・・・・次香取　神君および鹿島君　筑波、塩釜　諸もます」と多賀の国府を訪問したことが記載されている。

このことから経津主神、武甕槌神は、塩釜神社に関係がある神であることが掴めた。いずれにしても経津主神、武甕槌神は、ホツマツタヱ文献には、「フツヌシ」、「タケミカツチ」と記載されており、塩釜神社の「参拝のしおり」と同じ呼び名である。一方、塩釜神社の祭神である塩土老翁神については、ホツマツタヱ文献の記載は「シホカマのカミ」「シホカミ」「シホカマ」「シホツチのオキナ」と記事の内容により多彩な呼び名である。だが年代的に見ると「シホカマのカミ」「シホカミ」「シホカマ」の表現は、12文、13文の紀元前1217年頃になる。「シホツチのオキナ」の表現は、29文の紀元前667年頃になる。すると「塩釜の神」「塩神」「塩釜」と「塩土老翁神」とは、別人である可能性が高い様だ。

この根拠として塩釜の神は、フツヌシやタケミカツチと同時代の人である。それに対し塩土老翁神は、29-11文「塩土の　翁勧めて　ニギハヤか　いかんぞ行きて　平けざらん・・・・君速やかに　御幸なせ」とカンタケに「神武東征」を勧めた神である。年代差的には、約500年～550年の開きがある。

志波彦神社

塩釜神社にお参りしたあと、駐車場に戻ろうと左方向に進路を変えて参道を歩き始めた。すると左手側に聞き慣れない神社があった。恐る恐る近づいて確かめると「志波彦神社」と案内版に書いてあった。だが聞き慣れない神社であるため、社殿に参拝したあと祭務所に「ご由緒」を尋ねて見た。すると呼び名は「シワヒコ神社」と読み、また「志波彦神社は塩釜の神に協力された神と伝えられ、国土開発・産業振興・農耕守護の神として信仰されている。」とのことであった。

それにしても「シワヒコ」と云う言葉はどこかで聞いた言葉であった。しばらくして「シワヒコ」→「シワ」→「シワカミの　ココロホヅマと　ナルトキハ」を思い出した。この「シワヒコ」の言葉はホツマツタヱ文献には記載されてないが、「シワヒコカミ」より「ヒコ」を抜くと「シワカミ」となる。このことからもホツマツタヱと何らか相通じるものがある様だ。

更に「志波彦神社」の案内板に近寄り記載内容をもう少し読んで見ると、「志波彦神社はもと、・・・仙台市岩切冠川(七北田川)の畔に鎮座され、陸奥国延喜式内社百座のうち名神大社として、朝廷の厚い信仰があった。・・・(省略)・・・明治天皇の御思招により、明治七年十二月二十四日に塩釜神社の別宮に遷し祀られた。・・・(あと省略)・・・」と記載していた。あとはホツマツタヱと関連ある神社であるか、今後「仙台市岩切冠川(七北田川)の畔」の調査を計画したい。

金華山

　塩釜神社から金華山までは地図を見て戴けるとわかってもらえると思うが、相当な距離がある。そのため塩釜神社から女川港まで車で行き、そのあと船で金華山に渡ろうと車を飛ばした。だがカーナビが途中で不調になり女川港に着いた時は、予定した船が出発し出た後であった。従って今回は、金華山行きを中止した。それにしても女川港は凹またはコ形の内に港がある、大きな天然の漁港であり素晴らしい港であった。そのあと、女川港から松島を経由し仙台市内へ戻ることにした。次の日は、勿来関の調査が待っている。

勿来関

　次の日勿来関に行くために、仙台駅より特急に飛び乗り「勿来駅」に向かった。勿来駅の場所は仙台駅と上野駅のほぼ中間くらいの位置にあり、勿来駅到着は特急で約 2 時間強の旅であった。そして勿来駅からは勿来関までは、徒歩にするかタクシーにするか迷ったが、タクシーを選択し調査時間を確保した。時間的にはタクシーで僅か約 7 分程度であった。

　勿来関を初心者向けに簡単に案内すると、住所は福島県いわき市勿来町になる。また福島県と茨城県の県境にある。その勿来関を地形的に見ると小山の断崖が、海岸線まで出っ張っている。また街道は、関の手前と向こう側では海岸近くを通っているが、勿来関の近くより小山越えする様に山頂に通じていた。そのほぼ山頂に「勿来関」があった。

　この「勿来関」についてホツマツタヱ文献は、11 文にて「勿来の風情や海産分を交え心豊か」に記載している。それは現在人が「心の豊かさ」を追求している遥か、大昔に「古代人」は「心の豊かさ」の掴み方を知り尽くしていた様だ。

11-10 文

かねてホツマと
日高見の　境に出待つ

11-11 文

フツヌシが　坂向かひして
初(ウエ)見ゑ　伯父と甥との
盃の　ササ(酒)の眺めは
岩の上　フリ(風景)はよろしき

11-12 文

浜久し　波打ちかぎり
岩洗ふ　ミルメ(海松布)蛤(アフカヰ)
緩浜お　問えは名もなし
フツヌシも　名こそもがなに

11-13 文

カスガマロ　直ぐさの歌に
名こそ知る　フツの御魂の
ササ(酒)迎ひ　貝の蛤
会う御伯父　甥の見る目も

11-14 文
年波みの　　名こそ知るべゆ
因み会う浜
勿来なる　　酒飲む合いに
桜の実　　秋帰る日も

11-15 文
酒送る　　カダシおとりて
肴海苔　　同じ道して
宮に入る

　ここで記載したホツマツタヱ文献の 11-10 文～15 文について、私の現在訳文を掲載しようと思ったが、ホツマツタヱ研究の先輩である高畠さんの訳文をホームページで見つけた。読んで見ると余りにも名訳のため、今回は先輩の訳文を借用させて戴きましたのでご覧下さい。

（訳文）
　ホツマからヒタカミの国境まで勅使を境（酒）迎えに出かけたフツヌシと勅使のカスガ・ワカヒコ（天児屋根）は共にこの時の出合いが伯父と甥の初対面となった。お互い寿を祝い合った後、甥のワカヒコは伯父の境（酒）迎えを感謝しつつ盃を受けた。そして二人の酌み交わす酒席からの眺めは、丁度浜辺に突き出た庇の様な岩上の絶景の高台で、白波は絶えることなく打ち寄せ岩を洗い続けていた。ワカヒコはあちこちに打ち寄せられた、海苔（みるめ、食用海藻）や蛤（はまぐり）が散り敷かれたゆるやかな浜の、のどかな風情に魅せられて、思わずこの浜の名を伯父に聞いた。このとっさの「問い」にさすがのフツヌシも言葉に詰まって、「名こそもがな」（名前があるのだろうか）とつぶやいた。これを聞いたカスガマロはすぐに即興の歌を詠んだ。

名こそ知る　フツの御霊（みたま）の　酒迎い（ささむかい）
貝の蛤（はまぐり）　会う御伯父（みおじ）　甥の海苔（見る目）も
年波（としなみ・年齢）の　名こそしるべゆ　因（ちな）み合う浜

（訳文:名は解りました。今フツヌシの御心のこもった酒迎いを受けて、伯父と甥の私は蛤の貝の様に親しく合うことが出来ました。又、この甥は、（伯父の）見る目も御覧の様に今では年頃の若者になりました。名前は決まったも同然。この因み合う浜の。）
　ここで名前が「なこその浜」（勿来の浜）と決まったのを祝おうとした二人は、近くから桜の果を採って食べ、酒を呑んで思い出としました。そして再び秋帰る日にも同じ風光明媚なこの岩の上で酒（境）送りの宴が開かれ、この時は固塩（かたじお）と魚（さかな）と海苔（のり）を酒の摘みにした所から、酒を呑む合間に摘む食べ物のことを、この時から酒の肴（さかな・魚）と言う様になったホツマツタヱ文献は伝えている。

　タクシーで勿来関に到着した。そしてタクシーを降りて少し歩くと、勿来関の入り口に着く。そこには「勿来関」を記載した石碑があった。石碑の内容は、次の通りであった。それにしても「名こそもがな」→「勿来」→「菊田」→「勿来」と地名が変わって行く過程であろうか、石碑より歴史を感じてしまった。

勿来関

勿来関は、もと菊田（いわき市南部の古名）関と呼ばれ今を去る千五百有余年前に設置されたといわれ、白河関・念珠関と並んで奥羽三古関の一つとして名高い関所である。
これを「勿来」すなわち「来るなかれ」と呼んだのは平安中期ごろからであり、北方の蝦夷の南下をせきとめるためであったと言われている。
又平安初期の弘仁２年、いわき地方の駅路（官道）廃止にともなう通行止めを監視する関とする説もある。
平安時代も終わりに近い後三年の役のとき陸奥守源義家が、その平定のため奥州に下向する途中ここにさしかかる。
折りしも盛りの山桜が春の山風に舞いながら路上に散りしいていた。
行く春をおしむかのように、武将の鉄衣に舞いかかる桜の花にさすがの義家も今はただ余りの美しさに駒をとどめ

吹く風を　勿来の関と　思えども
道もせに散る　山桜かな

と詠じたのが、勅撰の千載和歌集に載せられ勿来関の名を今の世に伝えている。

いわき市

また勿来関はこんもりとした小山である。その小山の間道の両側には、古代の著名人が読んだ「勿来関」に関する和歌の石碑が沢山残されていた・・・・。

今回のホツマツタエ「ゆかりの地」を歩く旅は駆け足であったため、思う様な調査ができなかったが、ホツマツタヱを再発見する旅にはなった様だ。

（おわり）

（ご参考）

千葉県にある香取神宮を訪問したのは、もう７～８年も前になるだろうか。その時トヨケ神の子供である経津主が祭神であることを知った。その後、ある夏に群馬県の榛名山に行った際、途中で何気なく富岡市の「一宮貫前神社(ぬきさきじんじゃ)を発見しお参りした。その時ご祭神が、経津主のお妃であることを知った。この神は経津主のお妃で、姫大神と云った。

今回塩釜神社の祭神に経津主が祭られていたが、得てして古代の神は現存を疑われ易いが、前述の様にホツマツタヱに記載されてない個所でも、経津主のお妃であることが証明されており、ホツマツタヱの真実性が更に証明される。